

新譯

水滸すゐ傳でん

佐藤春夫





新譯

水滸すみ傳こでん

第六卷



佐藤春夫

中央公論社

新 譯 水 滸 あす
こ
んで 傳

昭和二十八年三月二十日 印刷
昭和二十八年三月廿五日 發行

第六卷 定價二五〇圓

譯 者 佐 藤 春 夫

發行者 栗 本 和 夫

東京都千代田區丸之内二ノ二

印刷者 中 内 佐 光

東京都千代田區飯田町

發行所 中 央 公 論 社

東京都千代田區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルディング五九二區

電話 和田倉 一〇二二番

振替口座 東京 三〇四番

目

次

第六卷

第四十七回

撲天鷗 ふたたび生死の文を書き
宋公明 ひとたび祝家莊をおそふ

七

第四十八回

一丈青 獨り王矯虎を捕へ
宋公明 再び祝家莊を打つ

三

第四十九回

解珍、解寶 相ともに獄よりのがれ
孫立、孫新 大いに牢をおびやかす

三

第五十回

吳學究 ふたたび連環の計を掌り
宋公明 みたび祝家莊に襲ひ入る

八

第五十一回

揮翅虎 枷にて白秀英を打ち
美髯公 誤つて幼主を見失ふ

一〇

第五十二回

李逵 殷天錫を打死し
柴進 高唐州に失陥る

三七

第五十三回

戴宗 たくみに公孫勝を迎へとり
李逵 斧もて羅真人をつんざく

一六

第五十四回

入雲龍 法を闘はして高廉を破り
黒旋風 穴をさぐりて柴進を救ふ

一六

第五十五回

高大臣 三隊の兵をうごかし
呼延灼 連環馬を布きつらぬ

一三

第五十六回

吳用 時遷に甲をぬすましめ
湯隆 徐寧を山へおびきよす

二四

挿 畫 雙劍一丈青

口 繪

祝家村迷路

面 二六

高廉妖術

一六

口繪・挿畫・裝釘

小
杉
放
庵

新譯
水^{すゐ}滸^こ傳^{でん}

第六卷

第四十七回

撰天鵬 ふたたび生死の文を書き
宋公明 ひとたび祝家莊をおそふ

さて、楊雄はそのとき直ぐと、ひざまづいた相手をおこして、石秀にひきあはせた。

「こちらは、また、どなたです？」

と石秀が問ひかけると、

「この兄弟は、苗字を杜、名前を興といふ、中山府の人なんだが、顔のみてくれがおっかないので、あだ名を鬼臉兒と云はれなさり、ずっと前に、あきなひで蘄州へ出なすつた折、むしゃくしゃして、仲間のあきんどをたたき殺した事件から、引っぱられて、あちらの奉行所へ囚はれの身の上、わたくしはこの兄弟の口ぶりで、拳や棒の使ひ手と見て取り、一所懸命、力をそへて、助け出してあげたものだつたが、これはまた思ひがけない、こんなところで今日めぐりあはうとは！」

杜興もそのとき、

「恩人、こちらへは、どういふお役目でお見えでせうか？」

楊雄は耳に口をつけて、

「わたくし、蘄州で人殺しをやつちまひ、梁山泊の仲間に入り、かうしていそぐ道すがら、ゆう

へは祝家店に宿つたんだが、いつしよに來た時遷つてのが、あそこの宿の時報の雞を盗んで食つちまひ、たうとう店の若いのとやりあふはずみに、つい腹立ちまぎれ、店に火をつけて灰にし、三人、夜つびで逃げるうち、何とうしろから追つかけて來やがったので、それで三人がかりでバタバタ何人か倒してゐるといふと、そのすきに草薙から二本の熊手がぬっと出て、時遷を倒してひきずつて行つてしまひやがつた。二人はそのままひた、走りに走りつづけ、ここまでやっと辿りつき、さて道筋を問ひ合せるつもりであると、つい圖らずも君に會つたといふわけさ。」

「どうか、恩人、ご安心なさいまし、時遷の方は助け出して差し上げますで。」

杜興はかう請け合つた。楊雄はまた、

「君、まあ、いつしよに腰をかけて、つき合つていただくかうよ。」

と、三人同座しての酒盛に移つたが、杜興はその際、

「あつしや荊州を離れてから、恩人さまのおなさけのお恵みをいただき、こちらまで來ました砌、當地の或る大親分にかあいがられました、おやしきにひきとられ、大番頭にされちまひ、千だ萬だと、まいにち金の出納を、あつしがすっかり預かつて、ひどく信用され、それで國へもう、歸らうたゝ思はなくなりました。」

「當地のその大親分とはどういふ人ぞ？」

楊雄は聞いてみた。

「當地には獨龍岡のてまへのかたに、三つの山岡がございまして、村が三ところ並んでゐて、まん

なかのを祝家莊、西側のを扈家莊、東側のを李家莊と云ひ、三つの莊、三つの村を合せると、コ、一、二萬の兵力にはなりますが、なかでも一番の豪勢なのが祝家莊で、おかしらの一家のあるじを祝朝奉と云ひ、子供が三人、『祝氏の三傑』と申しまして、總領が祝龍、二男が祝虎、三男が祝彪。ほかにもう一人、武藝の師匠で、鐵棒の樂延玉ってのがをりますが、こいつ、なかなか萬夫不當の勇氣がありまして、おやしきには腕のたつ莊客だけでも一二千はゐるのです。また西側の扈家莊の扈の大旦那の息子さんも飛天虎の扈成といひ、やっぱり大した腕前ですが、あそこにはもう一人、そのお嬢さんがなかなかのえらもので、一丈青の扈三娘といひ、日月の二刀をつかひ、馬に乗つてもたいした猛者！ また、こちら、東側の大親分は、つまり、あっしの主人で、苗字は李、名前は應、總鐵のみだれやきの鎗の上手で、おまけに背中にはちやんと五本の飛刀をかくし持ち、百歩はなれて人を倒すといふ神出鬼没。この三つの村では、生死を共にの誓願を立て、心を一つにして、吉にまれ、凶にまれ、たがひにたすけあふ仲ですが、梁山泊の方からの押借りを氣づかつて、みんなして防ぐやう、準備もすでにできてゐます。あっしはこれからお二人さんをおやしきへお連れして、李の大旦那にお會はせ申し、手紙を書いていただいて、時遷を助けるといたしませうよ。」

「その、君がいふ李の大旦那のは、」と楊雄は聞いてみた。「もしや、江湖でさう云つてゐる撲天鵬の李應ぢやないのか？」

「さうです。さうです。」

と、杜興は云つた。

「獨龍岡には、」と今度は石秀が、「撲天鵬の李應といふ好漢（よとくだて）がおいでだと、しきりに聞いてゐましたが、さうですか。こちらにおいでなんですかい。大した氣前のお人だつて噂（うはさ）だから、ぢやおたづねしてみませうぜ。」

楊雄は店のものに勘定（かんぢやう）をうながしたが、杜興はどうして、さうはさせず、自分で拂ひをすませ、三人そこを出て、そのまま楊雄と石秀とを李家莊へとみちびいた。楊雄が見わたすと、いかにも豪氣なそのやしきの、外まはりが廣い壕（ほり）で、岸には白壁（しろかみ）がめぐらされ、一かかへにも餘らうかといふ大きな柳が幾百本か。門のそとは吊橋（つりばし）で、門内へ道が通じてゐたが、その門を入り、母屋（おもや）へと來てみると、兩側に二十幾つかの鎗架（やうかけ）がならんでゐて、それにいっばい、砥（と）ぎすまされた武器が挿（さ）してある。

「どうぞ、お二人さん、ここでお待ちなすつて。あつしや、はいつて行つて、さう云つて、大旦那に出ていただきますから。」

杜興が、はいつて行つて間もないじぶん、李應は奥から姿をみせた。楊雄と石秀とが見ると、果しかつぷくのいい人物で、それに『臨江仙（りんかうせん）』の詞（うた）の證（あかし）もある。

臨（くまだか）まなこ 鷹（たか）ひとみ 頭は似たり 虎のそれ 燕（つばめ）のあぎと 猿（さる）のかひな 腰は似たり 狼のそれ。財ををします 義に仗りて英豪（えいごう）と交（まじ）り。めでて騎る雪白（しろ）の馬、このみて着る絳紅（あけ）の袍（ろはぎ）。背には五本の飛刀（ひがたな） みだれやき鋼（はがね）の鎗（やう）は ななめに銀（しろがね）の縞模様（しまもよう）あり。性剛（せうかう）にして、人には犯（とが）さしめず 李應すなはち眞の壯士 名づけて號（がう）す 撲天鵬（はくてんどう）と。

その時、李應が座敷前に來かかると、杜興は楊雄と石秀とを座敷に案内して李應にひきあはせた。

李應はそそくさと答禮して、座につくやうにと請ふ。二人は幾たびも譲りあつてのちやつと座についた。李應が酒などをとりよせてもてなすと、二人はまたもや再拜して、

「大旦那さまから祝家莊へ、お手紙をおやりいただいて、時遷の命をおたすけくださいますやうなら、ご恩は死んでも忘れないでございませう。」

李應は、屋敷で家庭教師をしてゐるものを呼び出して、一封の手紙をしたためさせ、本名を書き添へて捺印し、二番番頭のものにさづけて、早打ちの馬でもつて、祝家莊へ、時遷を引き取りにつかした。二番番頭は主人の手紙を預つて馬で發つて行つた。楊雄と石秀とは感謝した。李應は、

「お二人さん、ご安心なすつて、奥座敷で二三杯かたむけながらお待ちになつて下さい。」

と二人を裏につれて行き、やがて朝飯を出してもてなし、食事がすんで、お茶になると、李應は鎗の術などを云ひ出し、楊雄と石秀とがすぢのとはつた話をするのを聞いて、李應はひそかに喜んだ。やがて二番番頭がもどつたのは巳牌じぶん。李應は奥へ呼びこんで、

「連れてきた人は？」

と聞いてみると、二番番頭は、

「てまへ、じぶんで朝奉さまにお目にかかり、お手紙を差し出したのでございます。すると、はじめは引渡してくれさうでしたが、そのうちに『祝氏の三傑』が出てきますと、こんどは嚇となつちまひ、手紙の返事はくれず、身柄もよこさず、どうでもかうでも奉行所へつきだすと、さうおつしやるんでして。」

李應は聞くなりギョッとなり、

「われわれ三つの村同士は、生死の交の仲だ。手紙が行けば否應はない筈なのに、どうしたといふのだ。どうで、きさまが口不重寶なせるだらうから、杜君、ここは、まあ一つ君にご苦勞をねがひ、君が朝奉とか談判でくはしく話してはくれまいか。」

「わたくし參らせていただきたいものです。」と杜興はひきうけて、「ご主人さまがご直筆のお手紙をさへいただいて向うにまゐりますならば、きつとらちをあげさせますでございませう。」

「うん、よろしい！」

と李應はすぐさま花箋紙をまい取りよせ、みづから一筆はしらせ、封のおもてに署名し實印を捺して、杜興に手わたした。厩から足ばやなのが一匹ひき出され、鞍をおき、轡をはませると、杜興は鞭をとりあげて、屋敷の門を出て、馬に跨るや鞭を打ち、打ち、祝家莊へと駛せ出した。

「お二人さん、大丈夫です。わたくしの直筆の手紙が行きさへすれば、ほどなく歸してよこしてくれるにはきまつてゐるんですから。」

李應はまたかう云つて、感謝してゐる楊雄と石秀とを奥の間の酒もりでもてなし待たせてゐると、やがて、みるみる日の暮も近いじぶんになった。それでも杜興は歸つて來ない。李應は心もとなさに迎へを出さうとしてゐると、莊客が入つて來て、

「杜さんが歸りました。」

「二人でか？」

「いいえ、お一人で馬を飛ばして來ます。」

李應は首をふりながら、

「どうもをかしい。いつもだと、かうゴタゴタはしないのに、今日にかぎつてなぜ斯うなんだらう？」

楊雄と石秀も共に、座敷を出て行つてみると、杜興の門から入つて來た恰好は、紫色に顔色變じ、齒をむき出し怒でとみには口も利けぬ。詩の證にも云ふ。

生れながらの異相とて

怒ればなほさら大のぶざま

人三化七あやしおぞまし

まるで地獄の焦面王

李應はさしきを立ちいでて、氣をせきせき、

「さあ、どうしたんだか、詳しく、はなして貰はう。」

杜興は怒氣をしづめてから、

「あつしが、ご主人のお手紙をたづさへて、あっちへまゐり、第三の門まで入つて行きますと、バツタリ、そこにゐた祝龍、祝虎、祝彪の兄弟三人にであひました。あつしが三人に銘銘三べん、あいさつを致しますと、祝彪が、うぬ、また何しにうせやがつたと、かうどなりつけましたが、あつしやていねいにご主人からのお手紙ですと申しますと、あいつ嚇となつて、うぬが主人でな、どうしてさ

うトンチキなんだよ。朝っぱらも、間抜けをつかはして、手紙でもつて、梁山泊のあのぬすつと、時遷を渡せとのご託だ。だが、あいつァこっちで奉行所へ縄つきにして突き出すしろもの。それにまたしても何しにうせやがつたよと、ぶつくさです。あっしや、そこで、あの時遷は梁山泊の者ではございません。荊州からの旅人で、現にあっしの主人のところへ頼つて来て、つい誤つて、おやしきのお店を焼いたのでございますから、いづれ、それは主人からあたらしくこしらへておかへし致します。どうか、ここんところは、何ぶんご勘辨なすつて、とかう申しますと、三人いつしよに口をそろへて、うんにや、駄目だ、返さねえ！　そこで、あっしや、どうか主人が自分で書きなすつたこいつをごらんくださいましと、お手紙を差し出したんでございますが、すると祝彪め、そいつを受け取つて、ひらいても見ず、バリバリと裂いて棄て、やい、ものども、こ奴を表門へおっ抛り出せつと、どなりだしたばかりか、祝彪と祝虎と口をそろへ、やい、あんまり人をじらしやがると、うぬがとこの李應もひっ掟へて、梁山泊の強寇だと觸れだして突き出してくれるぞ。とまでほざいたぢやございませんか。あっしやこんなことア申し上げたくございませんが、まつたく以て、あいつら三匹の無禮たら、ご主人さまをさんざっぱら、口ぎたなく罵つたうへ、あっしを取り押へようとしますんで、馬を飛ばしてもどりましたが、あっしや途中でも腹が立つて腹が立つて。あん畜生ども年久しく生死の交の何のと云ひながら、今日となつちや、仁義もへちまもありやしません。」

詩にはそれをうたつて曰く、

だてに結ばぬ交りの